

ビルカの史的役割
——ヴァイキング時代のスウェーデン・ロシア関係——

角 谷 英 則

Birka's role in historical context

—Sweden and Russia in the Viking age—

Hidenori Kadoya

はじめに

20 世紀の大半を通じて、西欧中世・ヴァイキング時代の商業をめぐる研究は、1937 年にだされたピレンヌ・テーゼとそれに対するステューレ・ポリーンらの批判がひとつのおおきな基礎となってきた。「とざされた地中海」の交通にかわって、ロシアの水系と北ヨーロッパをつうじて、西欧とイスラム世界は間接的に接触をたもったという議論がおこなわれてきたのである。その根拠としては、ロシア、スカンディナヴィアで大量に発見されているイスラム銀貨があげられてきた。ユラン半島のヘゼビュー、スウェーデン中部のビルカ、フィンランド湾にちかいラドガ湖の南に位置するスターラヤ・ラドガといった、初期の都市的集落の形成も、上の文脈のなかで、とりわけ奢侈品をあつかう遠隔地交易を背景にもつものとして理解されてきたのである（クラーク他 2001:60、Ambrosiani 2004）。しかし、1990 年代の考古学の成果によってそのような議論の枠組みはなりたたなくなりつつある。北欧の都市的集落は、「シャルルマーニュ以前」の 8 世紀にその端緒がひらかれており、また北欧の代表的な都市的集落であるビルカでは、9 世紀なかばまたは末まで、バルト海以東の地域との接触規模のちいさかったことがあきらかになったのである。同時期、北欧から東方への入り口ともいえるスターラヤ・ラドガ自体もおもに接触をもっていたのはスカンディナヴィアと西欧であった。

ビルカ発掘とディルハム貨

1990 年代、ビルカの都市域の黒土地区とよばれる部分約 350 平方メートル、ちょうど街路でぎられた都市の一区画に相当する面積が発掘された（その報告と分析は Birka Studies シリーズとして第 8 巻まで刊行されている。第 13 巻まで発行される予定）。そこからは、8 世紀

後半から 970 年代にかけて、8 層にわたる文化層とビルカの最末期 20～30 年間に由来する耕地層が確認され、それぞれの層について絶対年代の比定がおこなわれている。各層に包含される遺物、とくに形式別に絶対年代が判明しているビーズをもちいることによって、各文化層の絶対年代推定が可能となっているのである。ビルカで出土したものと同種のビーズはデンマークのリーベにおける典型的な遺物でもあるが、リーベでは木片など有機物の保存状態がきわめて良好であるために、年輪年代測定を利用することができ、その結果はビルカにおける年代比定の根拠となりうるのである (Gustin 2004:98)。

周知のように、大量に出土した遺物のうち、貨幣はその銘から造幣年代を特定でき、かつ年代別の分布を量的に確認することもできるという特徴をもつが、これも年代比定の根拠となりうる。とくにイスラム貨幣の場合、イスラム歴による特定年に、西欧の貨幣でも数年間の範囲内にその造幣年はしぼられる。ただし、貨幣の造幣年代そのものによっては、埋蔵された限界年(それ以前に埋蔵されたのではないという年代)が確定されるのみである。しかし、遺物として発見されている貨幣は、基本的には造幣後、それほどの時間をおくことなく埋蔵・紛失によって土中にとどまることになったとかがえられてきた (Sawyer 1971:104f.)。その判断にしたがうなら、外来貨幣の出土量の変化は、その貨幣がつくられた地域、または運搬ルート上の地域と出土地のあいだの、それぞれの年代における接触・交流の頻度をしめす指標のひとつとなりうる。たとえば、ビルカやカウパングでは、発見されている貨幣の造幣年代分布に相当なカタマリがあり、出土のおおい貨幣の造幣年代には活発な対外交流、商品交換がおこなわれていたと解釈されてきた。ビルカの墓域から出土した貨幣の場合、800～820 年に造幣された貨幣がおおく、その量は 9 世紀をつうじて減少していったのち、10 世紀はじめにふたたび最大化、その後徐々に減少、10 世紀末には皆無となる。まったく同様の傾向は、フィンランド湾からキエフ、ヴォルガ中流域からドン川下流域にいたる範囲で発見された、42 個の埋蔵室 (780～1040 年のディルハム貨約 7000 個をふくむ) においてもみられる (Randsborg 1980:152-157)。

銀貨流入の背景

造幣年代によるディルハム貨の出土数のいちじるしい変移は、イスラム世界における造幣量の変化だけによって説明することが困難であり、交易(ディルハム貨の流入先となった地域による、奴隷・毛皮・武器などの商品供給とイスラム世界におけるそれらの商品需要)を反映するものと理解されてきた (Ibid.)。

東方からのディルハム銀貨の流入を、主として商業以外の要因、たとえば略奪・身代金・傭兵への報酬の結果とする議論もあり、たとえばカスピ海、黒海沿岸地域ではヴァイキングとおもわれる集団による略奪のあったことが知られている。とくに中世史家ソーヤーは、イギリス

の代表的古銭学者グリアーソンによって 1959 年にかかれた記念碑的論文が主張したような、中世初期西欧における交易外の交換（略奪・贈与など）がしめた位置のたかさや、経済人類学の成果を援用することの必要性を強調し、交易を第一の要素としてかんがえることをつよく批判している（Sawyer 1990:283ff., Grierson 1959）。しかし、アメリカの古銭学者ヌーナンはディルハム貨の流入について論じるに際して、フランス、イングランドなどの水系を利用してヴァイキングがおこなった西欧での略奪行は、喫水のあさい船による急襲と逃避によってなっていたこと、ロシアの水系（ヴォルガ川、ドニエプル川など）では、北海においてと同様にすばやく移動することは困難であった点にまず注目する。実際、マスーディー（10 世紀バグダードの歴史・地理学者）の手になるアラビア語史料によれば、912 年頃にカスピ海であったヴァイキング（ルーシ）の略奪行は、いったん戦利品を獲得したものの、イスラムの軍隊に包囲され、失敗におわっている。たとえばラドガ湖を経由してバルト海へとぬけるためには、水系間の原生林を陸上移動したうえで、ヴォルホフ川の難所をとらなければならなかった。またビザンツ皇帝につかえたスカンディナヴィア人も存在したが、その報酬になったとかんがえられるビザンツ貨は、ロシア、北欧においてきわめて少量しか発見されていない（Noonan 1994:216-218）。したがって、貨幣が北へとはこばれた要因としては、イスラム圏との交易を第一にかんがえざるをえないというのがヌーナンの主張である。ディルハム貨にかぎるなら、ヌーナンの議論には一定の説得性がみとめられるだろう。ただし、この問題は、とくにその理論面においてまだ追究の余地が十分にのこされているとおもわれる。

カローン貨幣と個別発見貨

ビルカではやくに発掘されているディルハム貨幣の一群は、墓域から副葬品としてみつまっているものである。副葬されている貨幣はいわゆる「カローン貨幣」、すなわち「死者の国」への路銀として解釈されている。墓に貨幣を副葬する習慣は、北欧ではローマ鉄器時代に出現し、葬制に顕著な特徴のみられるヴェンデル時代にはいったんめずらしい現象となるものの、ヴァイキング時代になってふたたびひろくおこなわれるようになった。貨幣は財布などにいれられて頭の下、腰の上などにおかれるか、直接手ににぎらされている（Andersson et al. 1999:31）。ビルカの墓域は 19 世紀末に 1000 基以上が発掘され、それによって 120 個のディルハム貨が確認されている。年代比定のためのてがかりが、おおまかな形式・副葬品にかぎられるという性質上、墓はつくられた年代をせまい範囲内にしぼることができないが、墓域を多面的に検討したグレースルンドによれば、比較的初期の約 30 基と後期の約 130 基に分類可能である（Gräslund 1980:3 および付属地図）。それらの墓でディルハム貨を副葬品にともなっている割合は、初期（8 世紀後半～9 世紀後半）がわずかに 2 基（約 6%）にすぎないのに対し、後期（9 世紀後半～970 年頃）では 50 基（約 38%）に達する（Gustin 2004:99f.）。

この傾向は、それぞれの貨幣の銘がしめす年代と出土量にもとづいて、イスラム貨幣の流入量・交易規模の変移、ひいてはビルカと東方世界との関係の変化を再構成してきた最近までの通説を否定するものとなっている。しかし、おそらく年代比定のあいまいさと定量化困難な点からであろう、おおきく注目されることはなかった。しかし、1990-95年のビルカ発掘では、都市域においてもおなじ傾向が観察されることがあきらかになったのである。発掘部分は時期によって9層に区分されているが、8世紀の層からみつまっているディルハム貨は1個のみ、その後、9世紀前半に1個、10世紀前半に29個（うち19個は埋蔵宝の一部）、最末期の約20年間から23個である。銀塊（溶解されたディルハム貨をふくむかもしれない）の場合は、8世紀から11個、9世紀前半から8個、9世紀後半から1個、10世紀前半から8個、最末期から10個である（Gustin 1998:76）。つまり重点はあきらかに10世紀以降にある。これに対し、80年代以前におこなわれた港湾、砦地区での発掘をふくむ調査においてみつかったディルハム貨の造幣年代分布は、7-8世紀が27%、9世紀が20%、10世紀が53%である。個別に単独で出土した貨幣にかぎると、890年以前が50%、890年代5%、900年代6%、910年代11%、920年代10%、930年代以降は数%と徐々に減少していき、960年代以降のものは2%のみである（Gustin 2004:107f.）。つまり、造幣年代の重心は9世紀以前のはやい時期にある。このように、90年代のビルカ発掘は、ビルカの調査でははじめて、推定ではあるにせよ、貨幣がとどまっていた層の絶対年代と、貨幣そのものの造幣年の比較、造幣と埋蔵の時間的なずれの評価を可能にしたのである。一般に、個別に発掘された埋蔵宝の研究においては、年代のてがかりを貨幣そのものに刻印された造幣年にもとめるほかなく、それにもとづいた議論がおこなわれてきたが、これらの情報は、その解釈に修正のめやすをあたえるものになる。すなわち、ビルカと東方世界との関係は、最初期（文化層では第2層。貨幣の造幣年では778/9年。8世紀末から9世紀はじめに埋蔵・紛失されたもの）からみとめられるが、900年以前において、貨幣の存在がまれであったことに反映されているように、東方との接触も限定的であったとかがえられるのである。出土貨幣の数は10世紀中に増加し、最末期に最多となる。これらの変化は、保管、埋納など、なんらかの意図にもとづいて、かつ一定量まとめてうめられた埋蔵宝ではなく、都市域から個別に発見されている貨幣に観察されるものである。したがって、各層からの出土量の量的変化は流入量の多寡、地域間関係の強弱を反映しているとかがえられる。

スカンディナヴィアのひとびとが東方世界と接触をもつにあたって、フィンランド湾からロシアへの入り口となったとおもわれるスターラヤ・ラドガの発掘成果もビルカのそれを補強している。ここでは750年代からスカンディナヴィアの様式をもつ遺物などがみつかっており、スカンディナヴィアとフリースラントの職人が活動していたとみられている。スターラヤ・ラドガとその後背地から発見された埋蔵宝においても、890年以前の貨幣がおおくをしめること

と、10世紀中に増加をみるという点において、ビルカ出土の貨幣とおなじ年代構成（たとえば、スターラヤ・ラドガにおいて発見されたディルハム貨のうち86%が890年以前）なのである（Gustin 2004:106）。これはビルカのディルハム貨がスターラヤ・ラドガを経由したためとかんがえられる。

ビルカとキエフ・ルーシ

ビルカと東方との関係の性質をうかがわせる遺物に、ハヤブサ文様のブローチがある。鳥のモチーフによる装飾品は、10世紀末から11世紀中にバルト海沿岸地域とロシアでみられたものであるが、とくにキエフ・ルーシにおいて鑄造された貨幣では、「王位にある」といった文句とともにハヤブサ文様が銘をなしていることが指摘されている（Ambrosiani 2001:11f.）。10世紀末、キエフ・ルーシで権力闘争をかちぬいたウラジーミルは988年頃からビザンツのソリドゥス貨を模した金貨をキエフでつくり、990年代か1000年頃には銀貨を発行している（Lindberger 2001:74f.）。これらには図像化されたハヤブサが文様として採用されている。さらに、子のヤロスラフも、西欧ではかんがえにくいことであるが、父のウラジーミルが存命中であった1015年頃からノヴゴロドで造幣をおこなっている。これらは出土数もきわめてすくなく、交換媒体としての機能はほとんどはたせなかったとみられるが、キエフ・ルーシにおいてハヤブサが支配者家系の紋章であったことをはっきりしめしている。

遺物のうち、わずかな量の装飾品などから人的・物的交流の存在以上のことをよみとるのはむずかしい。しかし、ビルカとその周辺地域で大量に出土する土器は、北ロシア産のものがおおきな割合をしめており、交流を量的な側面からはかることが可能になりつつある（発掘報告書の出版がおくれているために詳細は依然不明である）。1990年代の都市域発掘でえられた土器片は、旧来の形式にくわえ、その成分比による分析にもとづいて産地の分類がおこなわれている。さらにそれぞれが出土した層の絶対年代を参照するなら、土器だけによっても相当精緻にビルカの物流上の位置とその変化が判明すると期待されている（クラーク他 2001:227 / Ambrosiani et al. 1996:11f.）

以上のような東方との関係を念頭においた上でビルカの史的位置をさぐるとすればどのようなことをかんがえうるであろうか。まず、メーラル地域におけるビルカの位置と役割について、最近の発掘からえられた成果を概観する。

ビルカへの食糧供給問題

1990-95年の発掘では動物の骨が約6000キ口出土している。それらをもちいたビルカにおける食糧事情の分析によって、これまでは不明であったビルカがいかにして、都市的集落として存在可能であったのかという問題の一端があきらかになりつつある（Wigh 2001）。ビルカが

位置しているビョルケー島には、ビルカの住人が消費したであろう食肉などの食糧を十分に供給できるだけの生産能力がない。19世紀においても、ビルカの位置するビョルケー島には6,7世帯の農場があったのみである。したがって、ビルカへの食糧供給は、周辺のメーラル地域の農場がになっていたとかがえられる。11世紀、メーラル地域に存在した農場数は約4000と概算されているが、これは急速な人口増加を経験したヴァイキング時代ののちの数値である。ヴァイキング時代の墓の増加からは、7世紀はじめから100年につき50%の人口増加があったと推定されている。したがって、ビルカのあった時代、メーラル地域の農場数は2-3000であったと推計される。他方、500-600人の都市人口、すなわち専門的に食糧生産に従事しないひとびとに対して食糧供給をおこなうためには、ヴァイキング時代の平均的規模の農場100個分、または1000個の農場の総生産高の10%を供出することが必要であった(Broberg 1990:114)。ビルカの人口が10世紀に1000人に達し、同時期のメーラル地域に農場が3000あったとするなら、その年間食料生産高の7%をビルカの維持にあてなければならなかったことになる(Wigh 2001:136)。

これらの数値はきわめて仮説的な性格をのがれないが、ビルカの人口維持には外部からの相当量の食糧移入が必要であったことはたしかであろう。ビルカに供給された食糧が周辺地域の単なる余剰であったのか、またそれが税として徴収されたのか、贈与されたものか、商業・交換によるものかはさだめがたい。しかし、スウェーデン中部を中心として、ビルカで製造されたさまざまな青銅製ブローチが墓や定住地から出土しており、またビルカの都市域から出土したブローチの鋳型片は生産規模のおおきさをものがたっている。ほかに、櫛、ビーズ、鍛造された金属製品など、奢侈品から日常生活用品にいたるまで、ビルカの周辺地域にはビルカを経由しておおくのものもたらされていたとみられる。当時の農場は自給自足が基本であったが、あきらかに自給不能な品々も多数あったのである。たとえば、原料をえられないために鉄を自給できない地域もふくめて、一農場あたり年間約10キロの鉄を消費していたという試算もある(Broberg 1990:114)。したがって、ビルカをささえた地域の側に視点をおくなら、それぞれの農場は自給不能な物品を入手するための余剰生産をおこなわなければならなかったことになる。それは商品とするためであったかもしれないし、都市民へ贈与することによって、手工業製品を反対給付としてうけとるためであったかもしれない。「王」への貢納というかたちをとった可能性もかがえられる。

ビルカはある時点で、おそらく商業、手工業といった職能をもつひとびとを一カ所にあつめることによって、計画的に建設されたことがその構造からあきらかになっている。食糧をほとんど自給しない人口集積地である都市的集落が、食糧自給を基本とする社会のなかに短期間のあいだに出現・成立したことは、地域に深刻な食糧問題をひきおこしかねなかった。そうはならず、200年間にわたってビルカが繁栄・存続したという点は、ビルカの役割を解明する

ための糸口になりうるとおもわれる。こうしたビルカと周辺地域との依存関係をかんがえれば、ビルカを遠隔地との奢侈品交易をおこなうためのエンポリウムととらえ、「直接の後背地にとってなんら経済的重要性をもたない交易であった」(Lindkvist 1991:140)とすることはできないであろう。

ビルカとアーデルスエーの「王」

ビルカの歴史的な位置についてかんがえる際に、ふるくから注目されてきたのが、アーデルスエー島のホーヴゴーデンにあるアルスネーフースという王の居館である (Ambrosiani et al. 1993:39f.)。アーデルスエー島はビルカの位置するビョルケー島のすぐ北にあり、ホーヴゴーデンはビルカをのぞむ位置にある。アルスネーフース自体は、ビルカ消滅後の 1270 年代に建設されたものであるが、その一帯には 7、8 世紀から中世末にいたる遺構が豊富にある。建造物のあった台地、いくつかの墳丘墓と「シングの塚」、その南には教会がある。北西へ数百メートルのところには平均的規模の墳丘をともなう墓域がある。教会と居館のあった台地のあいだは標高が 5 メートルであり、中世初期にはせまい入江となっていたとかんがえられるが、その入口には「ルーデンの王の代理トーリル」について言及しているおおきなルーン石碑がある。碑文では、「ホーコン」という名が王として言及されているため、この石碑はホーコン・レーデが支配した 1070 年代に同定されている。20 世紀はじめに発掘された墓域は鉄器時代後期に属し、ここの他ではビルカでしかみつからない「フリースラントのみずさし」やヘゼビューでつくられた貨幣が出土している。数基ある大墳丘墓は、そのうち Skopintull (語源不明) とよばれる塚が発掘されている。この火葬墳丘墓からは約 50 リットルという大量の骨と、船の鉄鋌、鉄釘がおおく発見された。これらは被葬者がその身のまわりの品とともにやかれた痕跡である。円筒形の青銅製容器には、骨のほかにおそらく黒髪の女性のものとおもわれる人毛がおさめられていた。同時代の副葬品に類例はないが、当時ひろくみられた女性の犠牲の代替物らしい。人骨は中年男性のもの一体しか確認されていないが、ガラスやカーネリアン (紅玉髓) 製のビーズなど、女性の所有物とかんがえられる遺物もある。被葬者の男性の副葬品はきわめて豊富で、被葬者は、東方由来のハート形留め金のついたベルトと金糸のおりこまれた衣装をまっとうしていた。おおくの家畜とすくなくとも一頭の馬が副葬されたが、青銅製の馬具はきわめて精巧にできており、ボツレ様式 (900 年頃) をうみだした職人の手になるとかんがえられる。獣骨のなかには、遺物としては非常にめずらしい愛玩用の小犬や、オオタカ、ワシミズクがふくまれており、被葬者の社会的地位のたかさ、つまり被葬者が「王」かその息子であったことをしめしている。墓の年代は、馬具以外にも様式の明確な櫛の断片から 900 年頃、すなわちビルカが都市的集落としてあった時代に比定される。1990 年代のビルカ発掘開始後、ホーヴゴーデンでもふたたび調査がおこなわれ、ヴァイキング時代の巨大な口

ングハウスの土台が発見された。そうした大規模な建造物跡もメーラル地域の通常の農場ではまれであるが、ガムラ・ウップサラで類似の遺構が出土している (Ibid. 44)。

このように、ホーヴゴーデンは鉄器時代後期において、スカンディナヴィア全域のなかにおいても傑出した性格をもっていたとみられる。そこに拠点をおいた「王」的な存在がビルカの建設・維持にかかわったことは確実であり、それは『聖アンスガール伝』に登場する「王」(rex)のなかにふくまれていたとかがえられる。ビルカのような都市的集落は略奪に対して恒常的に軍事的な準備を必要としたから、「王」はその組織者・提供者でもあったはずである。したがって、10世紀末にビルカが放棄されたことも、ビルカの建設と同様に建設者の意志によるものであり、ビルカが廃墟となるのと同時期にシクトーナが、ビルカの場合とおなじく、あきらかな計画性をもって建設されている。また、上でみたように、8世紀中というはやい時期からビルカが東方との関係をもちはじめている点からすると、とくに10世紀中、アーデルスエーの「王」はキエフ・ルーシの支配層との密接な関係をきずいていたとかがえられる。その関係は、ビルカが放棄されたのちに建設されたシクトーナに拠点を置いたウーロプが、キエフ大公とむすんだ姻戚関係につながっていったものである。11世紀以降にきわだつようにみえるスウェーデン・キエフ間の支配階層における関係はかなりはやい時期にその端緒がひらかれていたとみるべきであろう。

文 献

- H.クラーク、B.アンブロシアニ (2001) 『ヴァイキングと都市』東海大学出版会。
- H.ピレンヌ他 (1975) 『古代から中世へ——ピレンヌ学説とその検討——』創文社。
- Ambrosiani, B., Erikson B.G. (1993), *Birka. Vikinga Staden, Volym 3*, Stockholm.
- Ambrosiani, B., Erikson B.G. (1996), *Birka. Vikinga Staden, Volym 5*, Stockholm.
- Ambrosiani, Björn (2001), "The Birka Falcon", *Eastern Connections Part One : The Falcon Motif. Birka Studies 5*, Stockholm.
- Ambrosiani, Björn (2004), "Recension : Origins of the European economy. Communications and commerce AD 300–900", *Fornvännen* 99.
- Andersson, L., Margareta B.–B. (1999), *Jarlabankeättens gravplats vid Broby bro. Arkeologisk delundersökning av gravplats med tre skelettgravar vid Broby bro, Täby socken och kommun, Uppland*, Stockholms Läns Museum, Stockholm.
- Broberg, Anders (1990), *Bönder och samhället i statsbildningstid. En bebyggelsearkeologisk studie av agrarsamhället i Norra Roden 700–1350*, Uppsala.
- Grierson, Philip (1959), "Commerce in the Dark Ages : A critique of the evidence", *Transactions of the Royal Historical Society, 5th series*.

- Gräslund, A.-S. (1980), *Birka IV. The Burial Customs. A Study of the Graves on Björkö*, Stockholm.
- Gustin, Ingrid (1998), "Means of payment and the use of coins in the Viking Age Town of Birka in Sweden. Preliminary results", *Current Swedish Archaeology*.
- Gustin, Ingrid (1998), "Islamic coins and Eastern Contacts", *Eastern Connections Part Two : Numismatics and Metrology, Birka Studies 6*, Stockholm.
- Hårdh, Birgitta (1996), *Silver in the Viking Age. A regional-economic study*, Stockholm.
- Lindberger, Elsa (2001), "The Falcon, the Raven and the Dove. Some bird motifs on medieval coins", *Eastern Connections Part One : The Falcon Motif. Birka Studies 5*, Stockholm.
- Lindkvist, Thomas (1991), "Social and political power in Sweden 1000–1300", *Social approaches to Viking studies*, Glasgow.
- Melnikova, E.A. (1996), *The eastern world of the Vikings. Eight essays about Scandinavia and eastern Europe in the early middle ages. Gothenburg Old Norse Studies 1*, Göteborg.
- Melvinger, Arne (1955), *Les premières incursions des Vikings en Occident d'après les sources arabes*, Uppsala.
- Noonan, Thomas S. (1994), "The Vikings in the East: Coins and Commerce", *Develpments around the Baltic and the North Sea in the Viking Age, Birka Studies 3*, Stockholm.
- Randsborg, Klavs (1980), *The Viking Age in Denmark. The formation of a state*, London
- Sawyer, Peter (1971), *The Age of the Vikings*, 2nd ed., London.
- Sawyer, Peter (1990), "Coins and Commerce", *Sigtuna Papers. Proceedings of the Sigtuna symposium on Viking-Age coinage 1–4 June 1989. Commentationes de nummis saeculorum IX–XI in suecia repertis. nova series 6*, Stockholm.
- Wigh, Bengt (2001), *Animal Husbandry in the Viking Age Town of Birka and its Hinterland, Birka Studies 7*, Stockholm.